

## 日本語学習者による 擬音語・擬態語の意味推測に影響する要因

前 田 未 央

### 1. はじめに

日本語における擬音語・擬態語の重要性は多くの研究者によって議論されてきた。例えば、田守・スコウラップ (1999: 1) は、日本語の擬音語・擬態語は日常会話だけでなく、文学作品、新聞、雑誌等にも幅広く用いられており、「感覚的なことばであるが、一般語彙よりも生き生きとした臨場感のある、微妙な描写を実現するのに、特に日本語にとっては不可欠な言語要素」であると指摘している。このように、擬音語・擬態語が日本語において重要であると位置づけられ、日常の言語活動においても頻繁に用いられることは誰もが認めるところである。しかし、日本語教育の立場からすると、擬音語・擬態語は必ずしもその重要性に見合う扱いを受けているようには思われぬ。例えば、秋山・押尾 (2008) はそれが現行の日本語能力検定に反映されていないことを指摘している。しかし、秋山・押尾 (2008) によると現在実施機関 (国際交流基金と日本国際教育支援協会) は日本語能力検定試験の改定に着手しており、新しい語彙表作成のためのデータベースの中には擬音語・擬態語に関するものも含まれていることから、新日本語能力検定試験には今よりも多くの擬音語・擬態語が含まれることになると予想される (注 1)。日本語能力試験は日本語教育の現場で大きな影響力を持っており、その改定に伴って今後は日本語教育の現場でも擬音語・擬態語が取り入れられるようになることが想像できる。そして、日本語能力検定の改定に象徴されるように、現在、日本語教育において擬音語・擬態語の取扱いに関する考えは転換期を迎えており、導入時期や指導方法など様々な研究が行われている。

しかし、以下で述べる「音象徴」の存在を考慮すると、擬音語・擬態語を日本語学習者に教える必要があるかどうかをまずは考えてみる必要がある。音象徴とは、音と意味の間に有縁性が見られる現象である (那須, 2007)。以下では日本語の擬音語・擬態語と音象徴について先行研究を参考に説明することとする。那須 (2007: 4) が「音象徴は人々の興味を惹きつけてやまない擬音語・擬態語の強烈な個性であり、それゆえに『オノマトペ研究=音象徴論』という理解も一般的である」と述べていることや、羽佐田 (2005) のように擬音語・擬態語の総称を「音象徴語」と呼ぶ研究者もいることからわかるように、音象徴は擬音語・擬態語の非常に重要な特徴のひとつであり、これまでに多くの研究者によって取り組まれてきた研究テーマである。Iwasaki 他 (2007: 55) は先行研究から音象徴の普遍性には限度が

あると考え、2種類の音象徴があるという可能性を示唆している。それは、「普遍的な音象徴 (universal sound symbolism)」と「個別言語特有のつながり (culture specific associations)」である。もし普遍的な音象徴が日本語の擬音語・擬態語に存在するならば、日本語学習者は音象徴を用いて擬音語・擬態語の意味を感知することができることが予想されるため、それらを学習する必要はないだろう。反対に、音象徴が存在しないとすれば、学習することなしにはそれらを理解することはできないといえる。したがって、本研究の目的は、音象徴の存在を確かめ、擬音語・擬態語を日本語学習者に教える必要性の有無を議論することである。しかし、擬音語・擬態語が文脈から完全に独立しているとは限らないので、学習者がそれらを推測する際には、音象徴だけでなく文脈情報も何らかの役割を果たしている可能性も確かめる必要がある。したがって、本研究では音象徴に加えて、文脈情報と学習者の擬音語・擬態語の推測の関係についても取り組むこととする。

その方法として、本研究ではSD法 (Semantic Differential法：意味微分法) を応用し調査を行うこととした。芳賀 (1988:197) によると、SD法とは、イリノイ大学のオズグッド (Osgood) が案出した一種の心理学的尺度 (モノサシ) である。芳賀は、この方法を用いることにより、必要なだけの形容詞対または形容動詞対の尺度のうえで、評価すべき対象物の印象をチェックすることができ、それによる評定の結果が数量化されることで価値対象物間の比較を客観的に処理できると紹介している。例えば、音象徴の通文化的普遍性に関して、Iwasaki 他 (2007) は、日本語母語話者と日本語を学習したことのない英語母語話者が、笑いを表す日本語の擬音語 (24語) と、歩き方を表す日本語の擬態語 (28語) を聞いた場合にどのように感知するかを、SD法を用いて調査した。その結果、Iwasaki らは、特に笑い方を表す擬音語・擬態語に普遍的な音象徴性が存在することを確認した。それと同時に、日本語母語話者による回答にしか見いだせない音と意味の連携が数多く確認されたため、日本語特有の音象徴の存在が示唆されていると結論づけている。本研究は、この Iwasaki 他による調査結果を基盤にし、以下の研究課題を設定した。

- ①日本語学習者／非学習者は、音声情報からどの程度擬音語・擬態語の意味を推測できるか。
- ②擬音語・擬態語の意味推測は、擬音語・擬態語の意味カテゴリーによって異なるか。
- ③擬音語・擬態語の意味推測は、日本語学習経験に影響されるか。
- ④日本語の学習者／非学習者は、文脈情報が付加された場合には、より正確に擬音語・擬態語の意味を推測できるか。

## 2. 調査方法

### 2.1 調査参加者

調査参加者は母語によって、ドイツ語母語話者と日本語母語話者 (Japanese Native Speakers, 以下 JNS) に分けられた。ドイツ語母語話者は全部で49人であるが、全員がドイツに住んでいる。そのうち日本語学習経験のない参加者 (Non-Learners, 以下 NL) のグループは全部で22人、年齢は20代から40代である。一方の日本語学習者 (Learners, 以下 L)

のグループは外国語として日本語を学習しているフンボルト大学ベルリン (Humboldt-Universität zu Berlin) の学生 27 人である。年齢構成は 10 代から 30 代である。日本語学習暦は 6 ヶ月から 2 年で、『みんなの日本語』初級 I・II 本を教科書として使用しながら、週に 5 時間の授業を受けている。日本語クラス担当の教師の話によると、授業の中で擬音語・擬態語を扱ったことはないということであった。次に JNS については年齢 20 から 50 代の 22 人であった。JNS からもデータを収集したのは、ドイツ語母語話者から得られたデータと比較するために、判断の基準となるデータが必要であるという理由からである。

## 2.2 テスト項目

### (1) カテゴリーについて

この調査では擬音語・擬態語の具体性の度合いが各選定語の理解に与える印象を調べることを研究課題のひとつとした。そのため擬音語・擬態語の選定は 4 つのカテゴリーに分類することとした。カテゴリー 1 は実際に耳で聞くことができる音を日本語の音声で象徴的に表した語である。カテゴリー 2 はある程度は音と関わりがあり、人の話し方を音声で象徴的に表した語で構成されている。カテゴリー 3 は、音ではないので聞くことはできないが手で触ると共有できる、触った感じを音声で象徴的に表した語で構成されている。最後にカテゴリー 4 は、物理的に聞こえないし触ることもできない、人の感情を音声で象徴的に表した語から成っている (詳細は表 2 参照)。

### (2) 擬音語・擬態語の選定

テスト作成に際しては、日本語の擬音語・擬態語において最も数が多いとされる「2 拍の語基を重ねる畳語」(守山, 2006) を 24 語選択した。擬音語・擬態語には様々なバリエーションがある。その結果、どの形を擬音語・擬態語とみなすかは研究者によって異なっており、本研究では誰もが擬音語・擬態語と認める最も典型的な語を選ぶこととした。これに該当する擬音語・擬態語は現代のみならず、奈良時代、平安時代など時代を通じて頻用されており、「日本の擬音語・擬態語の最も典型的なかたち」だと山口 (2002) も述べている。選定語の内訳は表 2 のとおりである。それぞれのカテゴリーには擬音語・擬態語が計 6 語ずつ含まれ、第二・第四音節を共通するペア 3 組を含んでいる。例えば、「からから／がらがら」ペアの第二・第四音節は「ら」で共通している。さらに、各カテゴリーから 2 語を選んで文脈情報を付加し、音声情報のみでテストをした場合の結果と照合し、比較することとした。

### (3) 評価のための形容詞対

先述のとおり、擬音語・擬態語の印象を数値にして測定するために本研究では SD 法を応用した。調査の前にまず形容詞対 (もしくは形容動詞対) を数個用意した。それから、「ネガティブ/-2/-1/0/1/2/ポジティブ」のように 5 段階スケールを作り、ある擬音語・擬態語の印象がこのスケールのいずれに当てはまるかを回答してもらう形式とした。2008 年 3 月にパイロット研究を行い、最終的に本調査のための形容詞対を 4 対ずつ選定した。その結果は表 2 のとおりである。テスト紙は日本語とドイツ語の両方で作成した。後者については、ドイツ語

に訳して利用した。訳文は、文脈情報の文章とともにドイツ語母語話者 2 人によるチェックを受けた。

表 1: 本研究のためのテスト項目

カテゴリー		音声情報のみ	文脈情報あり	形容詞対
↑ 具体的	1 音	からから／がらがら とんとん／どんどん ぱたぱた／ぼたぼた	からから がらがら	重たい／軽い 低い／高い 小さい／大きい にぶい／鋭い
	2 話し方	ぺらぺら／べらべら ひそひそ／ぼそぼそ ぽつぽつ／ぶつぶつ	ぺらぺら ひそひそ	暗い／明るい 小さな声／大きな声 なめらかでない／滑らか 楽しくなさそうに／楽しそうに
↓ 抽象的	3 触覚	ふわふわ／ごわごわ さらさら／ざらざら ねとねと／ぎとぎと	さらさら ざらざら	粘り気がない／粘り気がある 乾いている／湿っている やわらかい／かたい 汚い／清潔
	4 気持ち	うきうき／どきどき わくわく／びくびく ほくほく／ぞくぞく	どきどき わくわく	ネガティブ／ポジティブ うれしくない／うれしい 緊張している／リラックスしている 怯えている／怯えていない

回答方法についてであるが、本調査では、調査参加者はそれぞれの擬音語・擬態語を 2 回ずつ聞いて、それによって受ける印象を上述の 5 段階スケールからひとつの数字を選び回答した。テストを始める前に、本調査の目的、回答方法と 4 つの意味カテゴリーの説明を行った。また、実際のテストを始める前にはリハーサルを行った。テストの最後には、調査参加者の母語と日本語学習経験（もし日本語学習者であれば学習暦）を訪ねた。

### 3. データの分析方法

本研究では、音象徴の存在が確認されたとしても、正確な意味推測のような厳密な数値としては表出しない場合に備えて、擬音語・擬態語の意味推測の程度を 2 段階で観察することとした。したがって、本調査によって収集されたデータは、NL と L が日本語の擬音語・擬態語の意味をどの程度まで推測できたかを明らかにするために、「意味の方向性」（分析 A）と「推測の正確性」（分析 B）の 2 つの視点から分析した。分析方法についての詳細は以下のとおりである。

#### 3.1 各項目（形容詞対）の分析

まず分析 A の「意味の方向性」は、ある擬音語・擬態語を聞いたときに調査参加者がその語を、例えば「ネガティブ」と「ポジティブ」ではどちらの意味の方向にイメージしたかということに焦点を絞った分析である。この分析によって、調査参加者が擬音語・擬態語をどのようにイメージしているかを観察した。まず、調査によって得られた数値を計算し、全て

の項目（形容詞対）の平均値を求めた。次に、得られた平均値がプラスかマイナスかをチェックし、JNS 対 L、JNS 対 NL のグループ間で対比した。例えば、ある参加者グループによる回答の平均値が「ネガティブ/-2/-1/0/1/2/ポジティブ」の項目で「-1」になった場合、意味の方向はマイナスに向いていると判断した。本論文では、このプラス/マイナスの方向のことを「意味の方向」と呼ぶこととした。このように全ての項目の意味の方向を分析していき、方向性が一致する項目の数をカウントした。

しかし、意味の方向性は統計的な分析ではなく、非母語話者による擬音語・擬態語の意味推測についておおよその判断しかできない。そこで推測の違いをより正確に判断するために、統計による分析を行うこととした。これが分析 B である。統計分析に使用したのはノンパラメトリックの Mann-Whitney 検定である。統計処理に関しては、統計的有意水準を 5% レベルに設定し、グループ間の平均値に有意差がみられない場合 ( $p > .05$ ) は「日本語母語話者と比べ有意な差はなく、ほぼ同じ意味推測をしている」すなわち正確な意味推測ができているとみなすこととした。その上で、そのような項目が 4 組の形容詞対中に何個あるかをカウントした。

### 3.2 各擬音語・擬態語の評価

上述のようにして、分析 A では JNS と同じ意味の方向性をもつ項目の数を、分析 B では JNS の反応と比べて有意差のみられない項目をそれぞれカウントした。全ての項目の分析が終わると、各擬音語・擬態語を評価するために以下のような基準を設けた。分析 A では、JNS と同じ意味の方向性をもつ項目の数が 3 つ以上 (75% 以上) であれば、そのグループはその擬音語・擬態語の意味をおおまかに推測できたとみなした。それと同様に、分析 B でも、JNS と比較して有意差が見られなかった項目の数が 3 つ以上であればその語は JNS とほぼ同じレベルで正確に推測されたと認めた。表 2 は「からから」における JNS 対 NL の比較分析の結果の例である。

表 2: 語の評価例

形容詞対	分析 A : 意味の方向性				分析 B : 推測の正確性		
	JNS の平均値	NL の平均値	各項目の評価	対象項目全体の評価	M-W test の結果 (p)	各項目の評価	対象項目全体の評価
重い／軽い	1.55	0.45	*	○	0.000		×
低い／高い	0.86	-0.05			0.001		
小さい／大きい	-0.45	-0.41	*		0.893	+	
にぶい／鋭い	0.23	0.23	*		0.908	+	

分析 A の「各項目の評価」: \*= 意味の方向性の一致、「対象項目全体の評価」: ○=3 項目以上で JNS と一致  
 分析 B の「各項目の評価」: += JNS と比較して有意差なし、「対象項目全体の評価」×=JNS との一致が 2 項目以下

表2の例の場合、分析Aでは、3項目で意味の方向性の一致がみられるため、NLは「からから」の意味をおおよそJNSと同じように掴んでいると判断した。一方の分析Bでは2つしか有意差なしの項目がみられなかったため、NLは正確な意味の推測ができなかったとみなした。これらの結果をまとめると、NLは「からから」という語のおおよその意味を感知することはできたが、母語話者と同程度正確な意味推測はできなかったという結果になる。本調査では、このようにして全ての擬音語・擬態語についてJNS対NL、JNS対Lで比較分析した。

#### 4. 分析結果と考察

以下では、調査によって得られた結果を示していくこととする。まずは、NLとLの両者を合わせた結果の全体像を示す。図1は、本研究のために設定した擬音語・擬態語の評価基準をドイツ語母語話者が満たしている割合である。

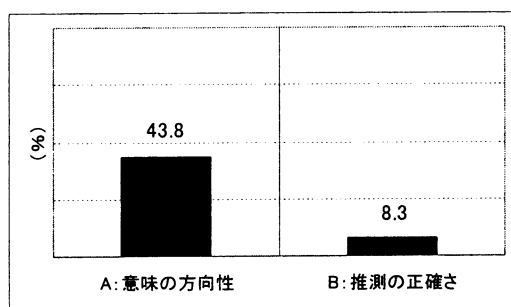


図1: 音声情報からの推測結果全体像(評価基準に達した語の割合)

グラフの左手(分析A:意味の方向性)は意味の方向性がJNSによる評価と一致し、ドイツ語母語話者がおおよそのイメージを推測できた擬音語・擬態語の数の割合である。グラフの右手(分析B:推測の正確さ)は、ドイツ語母語話者がJNSと比較して有意差が見られなほど正確に推測できた擬音語・擬態語数の割合を示している。図1のAを見ると、基準に達した擬音語・擬態語数の割合は、全体の43.8%である。半数までは届いていないが、ドイツ語母語話者はある程度擬音語・擬態語の意味を掴めていることがわかる。一方のBは8.3%となっており、基準に達した割合はAと比較してかなり低くなっている。この結果は、ドイツ語母語話者はある程度までは擬音語・擬態語のおおよその意味のイメージを掴めているが、その正確な意味推測までは至っていないことを示していると思われる。

次に、SD調査の回答を意味カテゴリー別に分析した結果を示していく。図2には、擬音語・擬態語の評価基準をドイツ語母語話者が満たしている割合をカテゴリー別に示した。

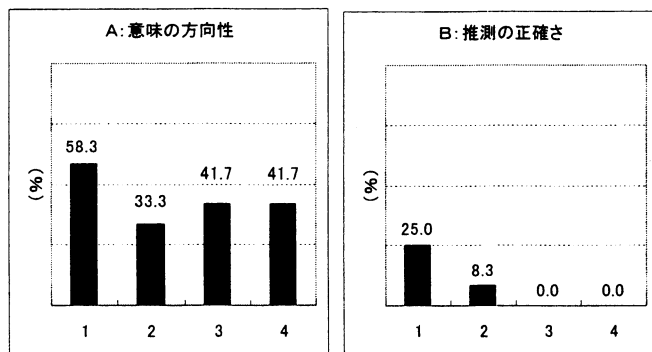
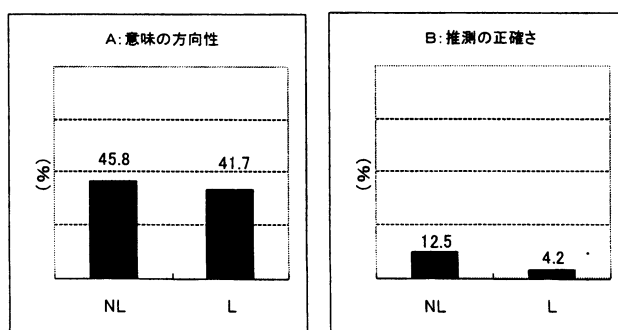


図 2: 音声情報からの推測結果カテゴリー別(評価基準に達した語の割合)

まず、基準に達した擬音語・擬態語の割合を左のグラフ(分析A)で見ると、カテゴリー1「音」が一番高く、58.3%であった。カテゴリー2「話し方」の擬音語・擬態語は33.3%で基準に達した割合が最も低い。カテゴリー3「触感」とカテゴリー4「気持ち」は両方とも41.7%という結果であった。一方、右のグラフ(分析B)を見ると、ドイツ語母語話者がJNSと同じように正確に擬音語・擬態語の意味を推測できた数の割合は非常に低いことがわかる。カテゴリー1「音」は25.0%という結果であったが、カテゴリー2「話し方」では8.3%、カテゴリー3「触感」とカテゴリー4「気持ち」では0%であった。これらの結果から、特に具体性の低いカテゴリーの擬音語・擬態語は、音声情報からある程度のイメージをつかむことができたとしても、それらの正確な意味推測は困難なようである。

以下では、調査で得られたデータを、学習経験のないNL(N=22)と学習暦半年から2年のL(N=27)間で比較分析して示す。



NL は非学習者、L は学習者

図 3: 音声情報からの推測結果 学習暦別(評価基準に達した語の割合)

まず、図3の左のグラフ（分析A）で基準に達した擬音語・擬態語数の割合を見ると、NLは45.8%、Lは41.7%となっており、いずれのグループも擬音語・擬態語の大まかなイメージはある程度までつかめていると言えるだろう。右のグラフ（分析B）を見ると、JNSと同じように意味を推測できた擬音語・擬態語数の割合はNLで12.5%、Lについては4.2%という結果であった。学習経験のないグループのほうが学習経験のあるグループよりも正確に擬音語・擬態語の意味を推測できたことから、2年程度の学習では擬音語・擬態語の推測に大きな影響を与えるまでには至っていないと理解される（注2）。

図4は、本研究のために設定した擬音語・擬態語の評価基準をNLとLの両者が満たしている割合である。既述の8つの擬音語・擬態語については、音声情報（sound）に加えて、文脈情報（context）を付加したテストも行った。

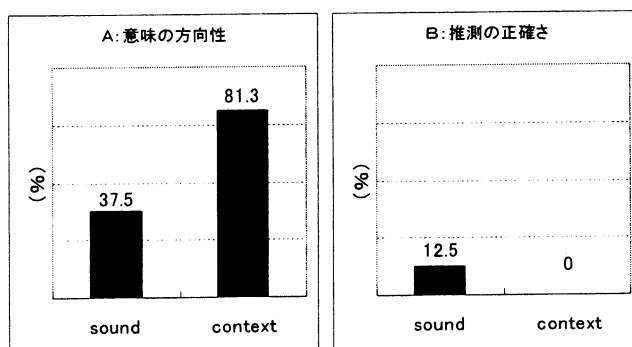


図4: 推測結果比較 音声情報と文脈情報（評価基準に達した語の割合）

まず、左のグラフ（分析A：意味の方向性）で基準に達した擬音語・擬態語数の割合を見ると、音声情報のみでは37.5%、文脈情報が付加された場合には81.3%であった。一方のグラフ（分析B：推測の正確さ）では、JNSと同じように正確に擬音語・擬態語の意味を推測できた数の割合は音声情報のみの場合は12.5%であるが、文脈を付加すると0%であった。

以下では、上で述べた分析結果にしたがって4つの研究課題に答える。まず、日本語学習者／非学習者は音声情報からどの程度擬音語・擬態語の意味を推測できるかという課題についてであるが、彼らはある程度までは擬音語・擬態語のおおよその意味のイメージは掴んでいるようである。しかし、その正確な意味推測までは至っておらず、日本語母語話者と比較して有意差がみられないほど正確に擬音語・擬態語の意味を推測することはほとんど不可能であった。この結果は、未知の擬音語・擬態語を音象徴から推測することはほとんど不可能であることを示唆していると思われ、学習を行わない限り日本語学習者が個々の擬音語・擬態語の意味を理解することはできないだろうと言えるだろう。

次は研究課題2についてである。日本語学習者の擬音語・擬態語の意味推測がどの程度ま



で通用するのかを調査するために、異なる具体性をもった意味カテゴリーごとに調査結果を分析した。その結果、意味カテゴリーによって擬音語・擬態語の意味推測の難度が異なっていた。特に具体性の低いカテゴリー3（触感）とカテゴリー4（気持ち）に属する擬音語・擬態語については、日本語非母語話者にとっては音声情報からある程度の意味の方向性がイメージできたとしても、正確に意味推測をすることは困難であった。

続いて研究課題3の、擬音語・擬態語の意味推測と日本語学習経験の関係についてである。分析結果から判断すると、日本語学習経験は擬音語・擬態語の意味推測に影響を及ぼしているとは言えないようである。本研究の参加者は半年から2年程度の日本語学習歴を有していたが、この程度の学習では擬音語・擬態語が十分に理解できるようになっているとは言えないようである。さらに、全員がドイツで外国語として日本語を学習していたため、擬音語・擬態語に触れる機会がほとんどなかったこともこの結果に影響している可能性についても考える余地がある。

最後は、研究課題4についてである。文脈情報が付加されると、擬音語・擬態語のおおよそのイメージは日本語母語話者に格段と近くなることが調査から明らかになった。しかし、文脈情報が正確な意味推測を助けたかと言えば、そうは断言できない。さらに文脈情報の影響についてより詳しく分析してみると、文脈情報は、ときに正確な意味推測を阻害している結果となった。例えば、「ざらざら」という語は文脈情報が付加されると、日本語学習者／非学習者ともに粘り気がある語だというイメージを持った。これは、「さとうが床に散らばった」という文脈情報の影響を受けていると考えられる。それに対して日本語母語話者は文脈情報を受けても「ざらざら」についてそのような評価はしなかった。非母語話者は、未知の語に出会った場合、推測の手がかりが少ないため、文脈の小さな情報にも大きな影響を受けやすいということが考えられる。また、調査結果において「どきどき」や「ひそひそ」など、文脈情報の影響によって母語話者の評価が大きく変化した語も確認された。これらは文脈によってイメージが変化するニュートラルな語だと言えるだろう。このような語は文脈情報が付加されることによって、母語話者と非母語話者の、その語についての印象が近くなる傾向にある。したがって、特にこのような語については与える文脈情報に注意する必要がある。場合によっては、ネガティブなイメージとポジティブなイメージの例文をそれぞれ与えて、これらの語がどちらの意味にも使用できることを学習者に教えることも必要になってくると考えられる。

## 5. まとめと今後の課題

本研究では日本語学習者／非学習者による日本語擬音語・擬態語の意味推測を、SD法を用いて調査した。結果として、日本語学習者／非学習者がある程度までは擬音語・擬態語のイメージを掴めることがいえるが、たとえ文脈情報が付加されたとしても正確な意味推測はほとんど不可能であることが言える。例外はカテゴリー1（音）を表す擬音語・擬態語の推測であった。したがって、本研究の結果は（特に具体性の低い）擬音語・擬態語は日本語学習者

に教える必要があることを示唆している。

今後の課題としては3つのことが挙げられる。まず、日本語学習暦が擬音語・擬態語の推測に与える影響をさらに正確に調査するために、日本語学習暦の長い調査参加者を含めて調査する必要がある。その際には、学習者がその語をすでに知っているかどうか、またそれらの語をどこで学んだかを訪ねなければならない。次に、筆者の予想以上に文脈情報が擬音語・擬態語の意味推測に大きな影響を与えていたことから、文脈情報の内容と形式(例えば文章、マンガ、写真や動画の使用など)を考えての調査は今後の日本語教育にとって有意義であると考えられる。最後に、擬音語・擬態語の導入時期について、特に、誰に、どのように、どの語を教えるのかも考慮しながらさらなる研究を続けていくことも重要である。その場合には、学習者の学習環境によって擬音語・擬態語学習のニーズが異なる可能性を考慮する必要がある。

## 注

- (1) 新試験出題基準分科会漢字表・語彙表部会のメンバーである秋元・押尾(2008)が発表した「新しい日本語能力検定試験のための語彙表・漢字表作成中間報告」を参照した。
- (2) 学習経験のないグループのほうが学習経験のあるグループよりも正確に擬音語・擬態語の意味を推測できた理由については本研究では明らかにできなかった。

## 参考文献

- 秋元美晴・押尾和美(2008)「新しい日本語能力試験のための語彙表・漢字表作成中間報告—新語彙表 ver. IIIの完成まで—」『日本語学』第27巻第10号, 明治書院, pp. 36-49
- 田守育啓・ローレンススコウラップ(1999)『オノマトペ—形態と意味—』, くろしお出版
- 那須昭夫(2007)「オノマトペの言語学的特徴—子音の分布と有標性—」『日本語学』第26巻第7号, pp. 4-15
- 芳賀純(1988)『言語心理学入門』, 有斐閣
- 羽佐田理恵(2005)『副詞的表現をめぐって—対象研究—』, ひつじ書房, pp. 175-211
- 守山恵子(2006)「日本語中級レベルの教科書に見られるオノマトペ」『長崎大学留学生センター紀要』第14号, pp. 53-62
- 山口仲美(2002)『犬は「びよ」と鳴いていた—日本語は擬音語・擬態語が面白い』, 光文社
- IWASAKI, N., VINSON, D., VIGLIOCCO, G. (2007), “What do English Speakers Know about gera-gera and yota-yota?” Japanese-language education around the globe; Japanese language education around the globe, vol.17, pp. 53-78